

あなたの眼鏡は何色ですか

甲陵中学校三年

平澤 ひらさわ

朋佳 とものか

〇、〇、〇、〇、〇、〇。画面に並んだ六

つのゼロ。私は驚きのあまり画面を三度見し

てしまった。

私は小学校からの宿題でハザードマップを

つくるための情報を集めていた。山梨県と言

えば、山に囲まれた自然豊かな地域だ。海は

ないため津波の心配はないが、その分土砂災

害の危険が高い。そこで私は、インターネット

トで山梨県の土砂災害危険区域を調べてみた。

土砂災害危険区域には、「急傾斜地の崩落」

「土石流」「地滑り」という三つの項目があり、

それぞれで「警戒区域」と「特別警戒区域」

が指定されている。検索をした結果、驚くハ

きことに山梨県の中で唯一、私の住む市町村

だけがどの項目でも指定がなく、表にゼロが

綺麗に並んでいた。

この表を見て私は「なんだ、私には土砂災

害なんて関係ないんだ、よかった。と安心し

きつて、今までには自分にも関係してくるか
もしれないと思つていた。土砂災害の記事も
「大変だなあ」と流すようになった。
そんな頃に考えていた七月三日。部活が終
わつて帰ると、弟が見ていたのかテレビが
けっけなしになつていた。アサウニサの
次のニュースです。という声と同時にテロツ
プが現れる。どうやら静岡県熱海市で大規模
な土砂災害が起こつたらしい。「実際の映像
です」と地面が切り替わつた瞬間、衝撃が走
つた。土石流がまるで生きているかのように
うねつて家も車も関係なく飲みこんでいく。
つい数秒前で家が建ち、車が走つていた場
所も一瞬で土石流に飲み込まれた。初めて本
物の土砂災害の様子を見た私は、茫然となつ
た。私は、自分には関係がないから大丈夫
と高を括つて、土砂災害について知らずとし
なかつた。だが、改めて考えると、これは大
きな間違いだつた。もしも出かけた先で土砂
災害にあつたら？もしも大人になつて二二い

ない土地に住むようになったら？たとえ今住んでいゝ場所が警戒区域に指定されていなくても、土砂災害に遭う可能性はいくらでもあゝる。少し考えれば分かることだ。私はやつとそのことに気づいた。

そこで私は土砂災害について向き合つてみようと思ひ、PAYコソを開いた。様々な記事を読んでいく中で、ある一つの文を見つけた。私はこれまで土砂災害は山の近くや山の中の地域でしか起こりえないと思つていたが、土砂災害警戒区域等以外でも土砂災害が起こる可能性があるらしい。調べてみようと思つていなかつたら、まつとこの事実も知ることになかつた。

私の祖父母の家は山の中に建つてゐる。祖父母の家が建つ地域は自然が豊かで、いつも遊びにいくと祖母は作つた野菜をくれ、祖母は猫と共に優しく迎えてくれる。私は祖父母も、祖父父母の家も大好きだ。だが、そこは山の傾斜が近く、私の家とは比べ物にならない

ほど土砂災害の危険が高い。確認してみると
特別警戒区域にも指定されていた。
もし、テレビで見ただけ、飲みこまれにくい建
物たちの中に祖父母の家があった。たとえたら。
より考えるところも恐ろしい。住んできた何
十年もの思い出が、一瞬で埋められる。家だ
けではない。土砂災害の前兆を正しく理解し
て、しつかりとした行動をとることができな
かったら、大切な命さえ失ってしまおう。

「ピニク色のレンズの眼鏡をかけたいる人

は世界がピニク色だと勘違いをしている。自
分が眼鏡をかけていることに気づいていない
のだ。
オーストリア出身の心理学者が「自己啓発
の父」と呼ばれているアルフレッド・アドラ
ーの残した言葉だ。
「いつてきます」と家を出て、「ただいま」
と帰ってこられる日常が永遠に続くとは限ら
ない。だがかつての私を含め多くの人は「そ
んなことはありえない」と眼鏡をかけたまま

まど過ぎしている。しかし近年、年を重ねる
ごとに災害は増え、規模も大きくなり、今ま
での当たり前前が通用しなくなってきたの
だ。何かあったとき、大事なものを守るため
まずは眼鏡の存在に気付くべきだ。自分には
関係がない」といふ色で染まっていた私の世
界は、眼鏡をはずすとがらりと変わって見え
た。

私たちがはじめにすべきことは気付くこと
だ。自分の世界は何色をしていたのか、眼鏡
をはずして初めて分かるのだから。